No.74
2019.1.8.発行

口腔外科医の道に進んで

西條　英人氏（高校43期）

東京大学大学院医学系研究科外科学専攻
感覚・運動機能医学講座　口腔顎顔面外科学　　准教授
東京大学医学部附属病院　口唇口蓋裂センター　センター長
宮崎大学医学部　顎顔面口腔外科学　臨床教授

■はじめに

歯科医師というと、皆様は近所にある歯科医院の歯医者さんを想像すると思います。これらのクリニック、実は、コンビニエンスストアよりも多いのは知らない方も多いかと思います。現在歯科医師は全国で10万におり、その多くは歯科医院に勤務しておりますが、一部では、特殊な専門性を生かして仕事をしている者もおります。実は私もそのような歯科医師の一人であり、口腔外科という専門的な仕事をしております。ここでは、この口腔外科の仕事について紹介し、立高生の皆様が将来像を描く一助になればと思い筆をとりました。

■学生時代

私の学生時代は、部活（バレーボール部）に夢中で、勉強は二の次でした。当然、将来をどうするかについては、何を考えたいたかも、今となっては記憶にありません。ただ、将来は何か人の役に立つ仕事をしたいと脳裏にはあったことは事実でした。その中でも医療業界に興味を持っていましたが、医療関係の学部に進学した場合、自分の将来が固定されてしまうのではないかとの懸念を抱いていたのは記憶があります。

■口腔外科という仕事

まずは口腔外科という仕事を紹介したいと思います。口腔内で手術が必要とする病気は、親知らずなどの抜歯をはじめ、癌（がん）、良性腫瘍、顎の変形、外傷（顎の骨折など）、先天異常、など、意外と多岐にわたります。私が専門としている領域の一つに口唇・口蓋裂という、生まれつき顔に形態異常のある病気があります。日本では500人に1人の割合で生まれますので、決して珍しい病気ではありません。この口唇・口蓋裂は、病態によっては成長に応じて手術をしていくため、成人になるまで手術は続きます。したがって、そのお子様のご家族とは、長い間の付き合いとなり、自分がした手術の結果とともにお子様の成長を見届ける事になります。そのため、自分のメスが、その子の一生を左右すると言っても過言ではないくらい非常に責任の重い治療になります。　こうした治療を行うには、若い頃からの勉強と練習が非常に大切な仕事でもあります。私も現在の病院に赴任してから、本格的に学び、当時は診療が終わり、夜遅くまで勉強と練習を繰り返したのを思い出します。現在までに2000件程の口唇口蓋裂関係の手術を行ってきましたが、まだまだ未解決の部分も多く日進月歩の領域であります。どんな職種でも、何らかの方法でトレーニングは必須であります。そのトレーニングした結果をいかに自分のものにするかが、それぞれの分野のエキスパートに成りきれるか否かのポイントであると今でも感じております。

■海外ボランティア

ある依頼をきっかけに、数年前よりベトナムでの口唇口蓋裂治療の医療ボランティアに参加しております。近年のベトナムは、大都市の発展は著しいですが、地方ではインフラを含め十分な医療水準に満たない所があり、貧富の差が非常に激しい地域であります。医療保障と経済が発展している日本では想像しにくいことですが、日本では、保険診療で治療出来る子供たちが、ベトナムでは治療を受けられずに成長している現場を目の当たりにしました。治療が受けられない子供たちは、成長過程で非常に大切な幼少期なのに、学校も行けず、友達も出来ず、中には家族からも敬遠される子供もおりました。初めて参加した時は非常に大きなカルチャーショックを受けました。こうした子供たちのために、自分の力を発揮できる素晴らしさを知り、今の仕事に対する非常に大きい達成感と誇りを感じました。

■立高生へ将来に向けて

私は歯学部に進学したため、大学進学と同時に職業の方向性が決まり、当時は、普通の歯医者になると思っていました。しかし、ある絆がきっかけで、今の口腔外科医としての道が決まりました。「絆」というものが、生きていく上で非常に大切と感じているのと同時に、こうした「絆」が自分の道を開くメインツールであると感じております。したがいまして、学生の皆様はこれからの人生、多くの出会いを経験すると思いますが、それぞれの出会いを大切にして、将来を考えて頂きたいと思い、立川高校OBの一人として筆をとらせて頂きました。これからも、陰ながら立高生の皆様の将来を応援しているとともに、歯科的なお悩みがありましたら、いつでもご相談下さい。